資料２

一般国道１号（保土ケ谷橋工区）における東海道の歴史的資源を活かしたみちづくり

１　一般国道１号（保土ケ谷橋工区）拡幅事業について

○市内有数の交通量

保土ケ谷橋交差点付近の１日当たりの交通量は約 43,000 台と市内有数の交通量であり、慢性的に渋滞が発生しているため、現在の３車線、幅員 18mから５車線、幅員 25mとする**拡幅事業**を進めています。

○旧東海道の保土ケ谷宿との重複

この保土ケ谷橋工区は、旧東海道の「保土ケ谷宿」に重なり、さらに沿道には、各時代の歴史を伝える歴史的資源である軽部本陣跡、旅籠本金子屋跡や震災復興橋である保土ケ谷橋などが残されています。

○地域住民主体のまちづくり

都市計画マスタープラン保土ケ谷区プランの「まちづくりビジョン」では、「旧東海道などの歴史資産を活用する」とされており、20 年以上前から保土ケ谷宿を中心とした歴史・文化資源を活かした地域住民主体のまちづくり活動が活発に行われています。

○整備方針の策定

拡幅事業を進めるにあたり、国道１号が市民に愛される良質な都市資産として末長く将来世代に引き継いでいけるみちづくりを行うため、『東海道の歴史的資源を活かしたみちづくり整備方針』を策定しました。

（１）事業概要

ア　箇所

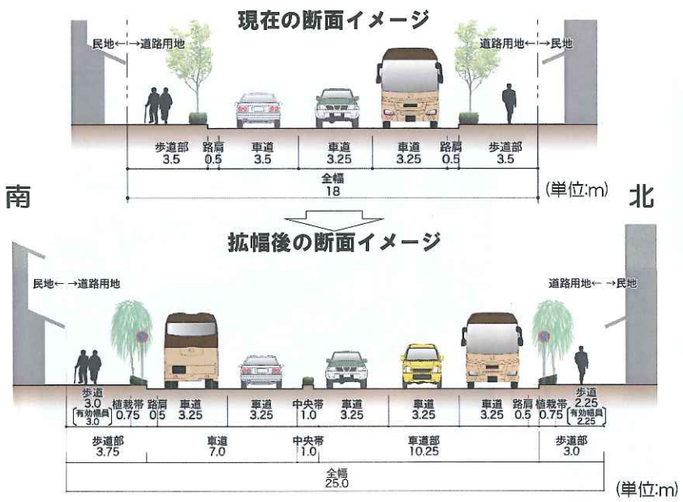
起点：保土ケ谷区岩井町（上岩間踏切出口信号交差点付近）

終点：保土ケ谷区保土ケ谷二丁目（岩崎ガード交差点付近）

イ　事業規模

延長：約 800m

幅員：25m（上り３車線、下り２車線の５車線）



案内図

（２）整備方針の検討体制

検討に当たっては、郷土史、土木史、景観デザイン、文化財建造物等各分野の学識経験者の方々から助言を受ける場として検討会を開催するとともに、周辺住民へのアンケート調査を実施し、これらを踏まえ整備方針をまとめました。

【検討会概要】

○検討会メンバー：

斉藤　司	（横浜歴史博物館 学芸員）	郷土史
伊東　孝	（日本大学教授）	土木史、景観工学
佐々木　葉	（早稲田大学教授）	景観デザイン・都市美対策審議会委員
大野　敏	（横浜国立大学大学院准教授）	文化財建造物

○検討準備会　：　道路局建設課、都市整備局都市デザイン室、保土ケ谷区区政推進課

○検討状況

第１回検討会　平成 23 年 11 月　：道路空間の整備方針策定における検討事項整理

第２回検討会　平成 24 年　１月　：整備方針、住民参加方法、歴史的資源活用方法

第３回検討会　平成 24 年　３月　：整備方針の確定

【アンケート概要】

○対象者　：保土ケ谷橋工区周辺住民（10 自治会）

○実施時期：平成 23 年 12 月

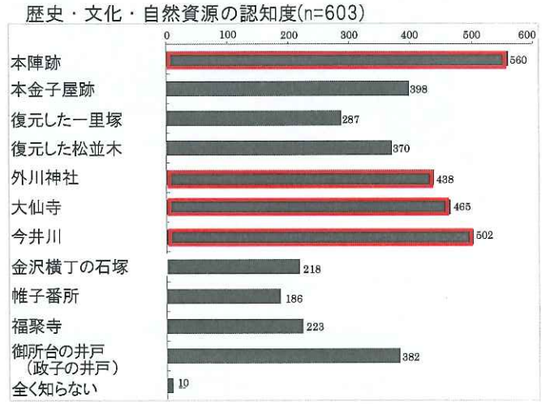
○配布数　：3,220 票（回収率 19%）

○結果概要：

・宿場町の一部であったことの認知度：93%

・保土ケ谷橋工区周辺の歴史・文化・自然資源の認知度：
　本陣跡、大仙寺、今井川などが資源として
　多くの人に認知されている

歴史・文化・自然資源の認知度(n=603)



２　『東海道の歴史的資源を活かしたみちづくり整備方針』の概要

（１）コンセプト

『東海道の歴史的資源を活かしたみちづくり
～多くの人に愛されながら保土ケ谷宿の歴史を紡ぐ～』

（２）みちづくりの基本方針

基本方針１：時代毎に刻まれた歴史を語り継ぐみちづくり

基本方針２：保土ケ谷宿周辺の多様な資源をつなぎ回遊の骨格となるみちづくり

基本方針３：歴史・文化を活かした交流促進と情報発信を支えるみちづくり

基本方針４：地域とともに創り育てるみちづくり

→ 整備計画の方向

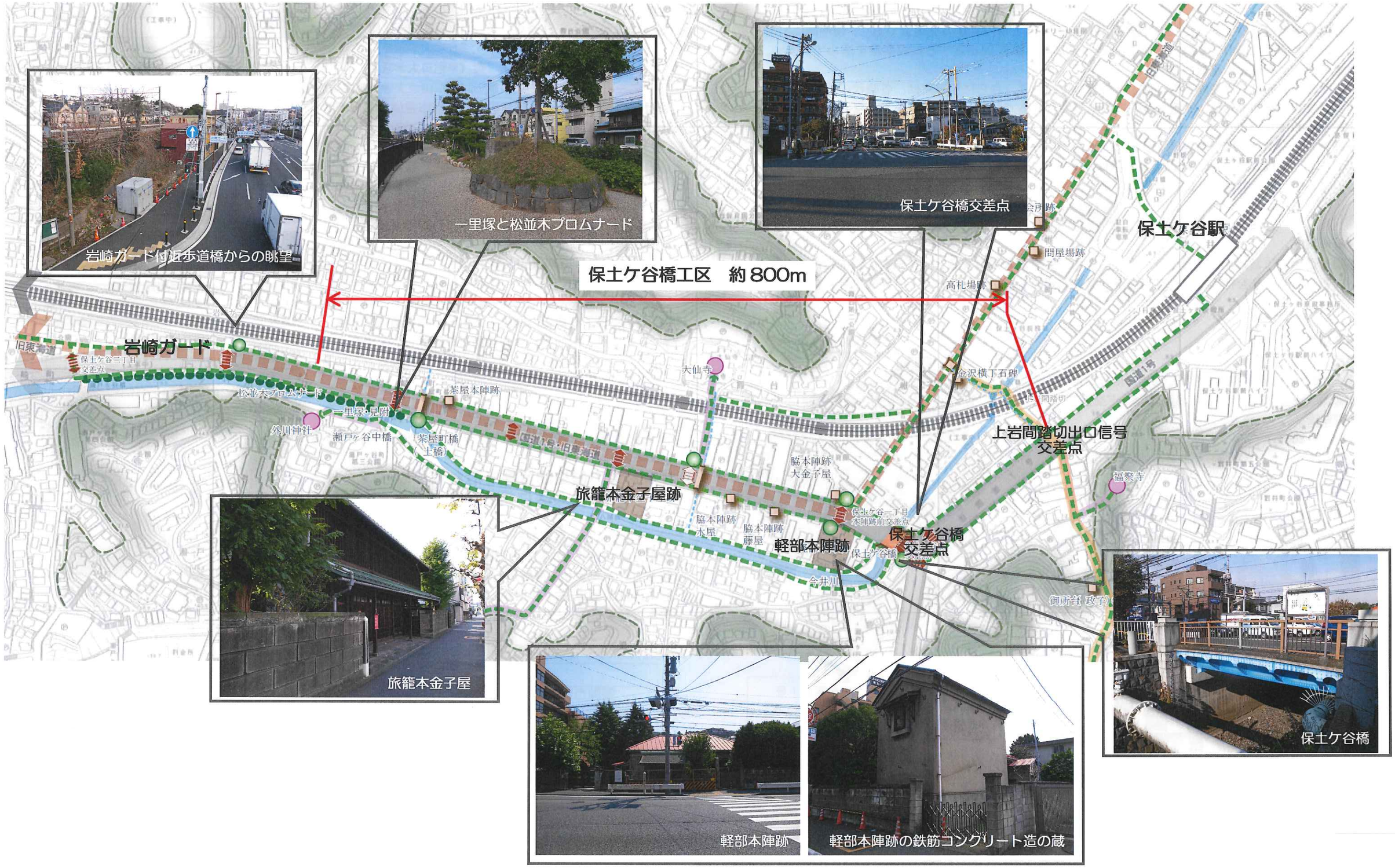
３　検討のスケジュール

	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度以降
整備方針検討（住民アンケート調査）	→			
整備計画策定（市民参加による検討）		→	→	
道路設計			→	→

※上記スケジュールはあくまで予定であり、決定したものではありません。

OPEN YOKOHAMA

現況図



東海道の歴史的資源を活かしたみちづくり
整備方針

平成 24 年 3 月

1 みちづくりの整備コンセプト

『東海道の歴史的資源を活かしたみちづくり』

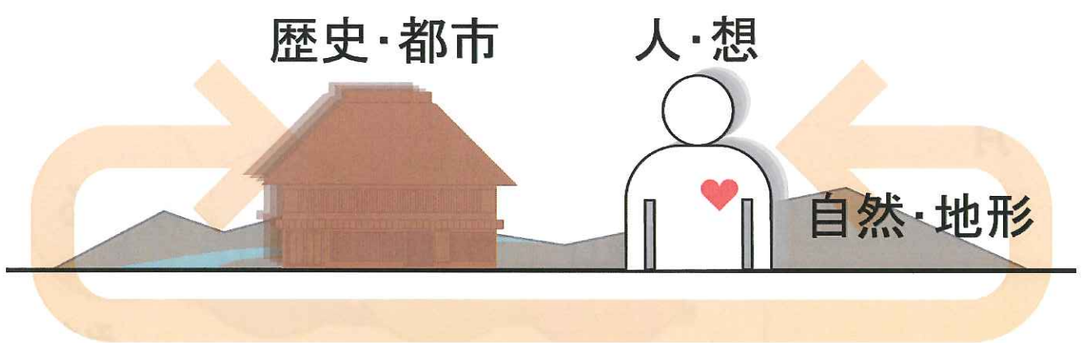
～多くの人に愛されながら保土ケ谷宿の歴史を紡ぐ～

保土ケ谷宿は、旧東海道において 1601 年に当時の保土ケ谷町（現在の元町橋付近）と神戸町（現在の天王町駅付近）の二町による宿として成立し、1600 年代半ばには「旧東海道（現在のＬ字型）の整備」や「今井川の流路整備」、「岩間町、帷子町の宿への編入」などが行われた。これにより、保土ケ谷宿はＬ字型という東海道五十三次の宿場町においても稀有な宿場のかたちを有することとなった。その後、明治期における鉄道整備や大正・昭和期の震災復興以降の現東海道（国道１号）の拡幅など行われている。このように保土ケ谷宿周辺では、時代毎に必要とされた都市形成の歴史を積み重ねてきている。

特に保土ケ谷宿は、横浜市内の東海道３宿（神奈川宿・保土ケ谷宿・戸塚宿）の中でも、軽部本陣跡や旅籠本金子屋跡などの貴重な歴史的資源が存続しており、多くの観光やまち歩きなどの利用者が訪れる場所となっている。

また、保土ケ谷宿周辺では、「松並木プロムナードの再生や管理」、「まちについての学習」、「まち歩きのガイド」など、地域の歴史を活かした住民主体の多様なまちづくり活動が行われており、保土ケ谷宿は現代においても周辺住民と密接な関係を持っている。

そのため、「保土ケ谷宿の特徴」を守り継承するために、道路整備においても、保土ケ谷宿をはじめとする周辺の歴史的資源やその経緯を継承・活用していくことで、より一層地域内外の多くの人から愛され続けるためのみちづくりを行う。



2 みちづくりの基本方針

基本方針1：時代毎に刻まれた歴史を語り継ぐみちづくり

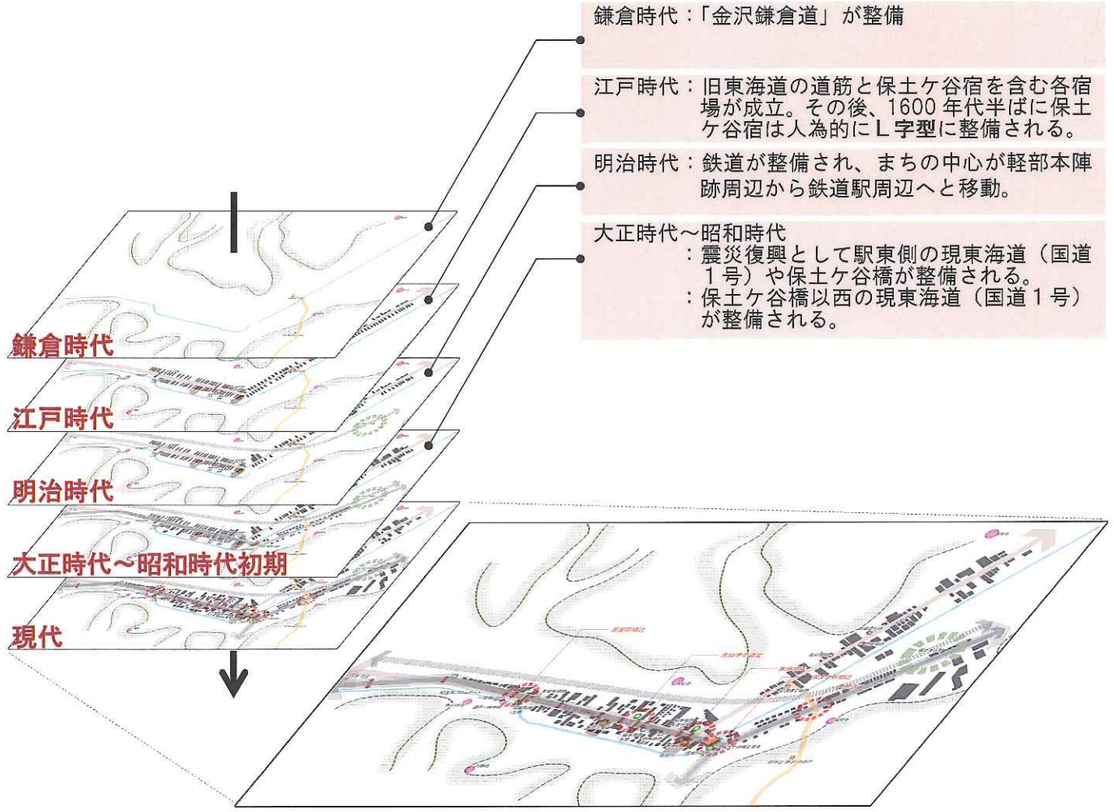
保土ケ谷宿は、江戸時代より旧東海道の整備や今井川の流路整備、明治期以降の鉄道整備や現東海道の整備など時代毎に求められる土木事業等を積み重ねてきている。保土ケ谷橋工区においては、歴史的資源を活かしたみちとして、これらの都市形成の歴史をできる限り継承していく。

（1）都市形成の歴史や保土ケ谷宿の特性の継承

保土ケ谷宿周辺は時代毎に求められる土木事業が積み重なった場所であり、特に、保土ケ谷橋工区は旧東海道の一部と重複し、沿道には宿場町が形成されていた特徴的な場所である。

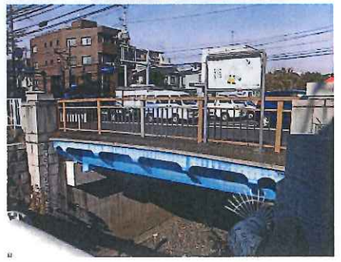
これらの歴史の変遷や保土ケ谷宿の特性を、道路整備の中に落とし込んでいくことで、歴史を伝え継承していく。

■保土ケ谷宿の都市形成の歴史



（2）軽部本陣跡や旅籠本金子屋跡、保土ケ谷橋等の現存する歴史的資源の継承

保土ケ谷橋工区では、現在まで残された軽部本陣跡・旅籠本金子屋跡・保土ケ谷橋という３つの核となる貴重な歴史的資源が存在する。それらを、保土ケ谷宿において紡いでいく歴史の核として、保存・復元・修景・再利活用を図っていく。



■軽部本陣跡

軽部本陣は、安政の大地震（1855 年）や関東大震災（1923 年）など過去の災害によって、再築や大修繕等が行われており、現在残されている門構えや母屋、鉄筋コンクリート造の蔵等も震災復興期に再築されたものである一方で、江戸期からの部材が再使用されている可能性が高く、歴史を継承したものとなっている。そのため、これら門構えや鉄筋コンクリート造の蔵の移築・保全や旧本陣の部材の再利活用などを図っていく。

■旅籠本金子屋跡

幕末期には脇本陣に準じる実績を持ち、明治初期に建築されたと想定されるが、封建体制下では成しえなかった脇本陣的な格式を併せ持って建築された近代和風の重要な作例としての平旅籠である。また、旅籠としての当初形式がよくわかり、時代の中での改造後も町屋の風情をとどめたものは極めて貴重であることから、曳き屋などにより、現在の建築を可能な限り保全していく。

■保土ケ谷橋

最西端の震災復興橋であり、親柱のほか、桁や束柱・縁石が良好な状態で残り、震災復興橋の橋詰広場の３大要素である、番所（交番）・火消し（龍吐水：軽部家所蔵の明治元年から伝わる消防設備）・トイレのうち、トイレを除く二つを備えているため、その要素を活かした橋梁周辺の整備を行う。

また、保土ケ谷橋工区内の茶屋町橋を整備する際に、保土ケ谷橋の桁を再利用するなど、積極的な材料の活用を図る。

（3）失われた歴史的資源の継承

保土ケ谷宿は都市形成の歴史が積み重なって構成されたまちである一方で、現在に引き継がれた歴史資料では不明な点も多く、その存在が知られていない資源や未だ隠れた資源が残されていると考えられる。保土ケ谷橋工区の道路整備を行う際には、現存する歴史的資源だけではなく、歴史資料「等から往時の町割りを町割石で再現したり、旧河川敷きや水路などの歴史的遺構の発掘調査を行うなど、新たな歴史的資源の掘り起こしに努め、失われた歴史を継承する。

（4）歴史が想い起こされるとともに後世にわたって継承される耐久性の高い道路整備

保土ケ谷橋工区の道路整備にあたっては、道路を利用する人に継承された歴史を理解し想像してもらうことが重要である。そのため、歴史のイメージの想起を促すデザインや仕掛けの導入を図っていく。また、江戸期であれば石や木、明治期であれば鋳などのように、継承する時代をイメージできる素材を使用する。良いものを長く大切に使い、歳月とともに味わいがだせるよう、飽きのこないシンプルなデザインとし、維持管理などに配慮した耐久性の高い素材を使用する。

基本方針2:保土ケ谷宿周辺の多様な資源をつなぎ回遊の骨格となるみちづくり

軽部本陣跡や旅籠本金子屋跡、保土ケ谷橋のほか、保土ケ谷宿周辺には、社寺や河川など多くの地域資源が点在していることから、これらの地域資源をより有効に活用し、さらなる回遊性の向上を図るための骨格となる道路として保土ケ谷橋工区のみちづくりを進める。

（1）回遊しやすい「みち」と「辻※」の整備

■「辻」の整備

点在する地域資源や今井川、周辺の山々などを効果的につなぐため、保土ケ谷橋工区をみちの骨格とし、各資源へつながる結節点に「辻」を設け、時代毎の歴史の積層と地域の構造が分かるよう整備を行う。

国道１号より大仙寺方面を望む

■回遊しやすい「みち」の整備

街道ウォークをはじめとするまち歩きのニーズの高まりを受け、保土ケ谷宿周辺においても、多くの来街者が訪れている。これら道路利用者が安全快適に通行し、信号待ち等を行えるよう、バスベイの切り下げ部分や辻空間については、都市計画道路線内用地だけでなく、必要となる部分を活用して、歩行や滞留空間を確保する。

※二つの道路が十字形に交差することに由来し、四方からの道が集まる交通の要所や交差点のこと

（2）回遊性を高めるサインや歴史解説板等の整備

■歩行者案内サイン

来街者が分かりやすく往来でき、保土ケ谷宿周辺資源への回遊性が高まるよう、歩行者案内サイン計画の策定や、地図サイン・誘導サインによる体系的なサイン整備を行う。また、旧東海道の道筋が分かるよう、軽部本陣跡前から保土ケ谷駅前までの旧東海道筋も含めた統一性のあるサインとする。

松並木プロムナードの歴史解説板

■歴史解説板など

来街者への情報提供のみならず、住民の地域理解を深めるため、保土ケ谷宿の歴史を伝える歴史解説板等を資源の付近や辻空間などに設置する。

基本方針3：歴史・文化を活かした交流促進と情報発信を支えるみちづくり

歴史的資源を活かした地域活動の活性化や、まち歩きなどの来街者や他の宿場との交流促進、時代毎に蓄積された歴史の情報発信などを支えるみちづくりを進める。

（1）保土ケ谷宿のまち歩きの支援と情報発信・ＰＲ

横浜市内の東海道３宿（神奈川宿・保土ケ谷宿・戸塚宿）の中心で、宿場の資源が最も残されていることから、市内３宿の核として情報発信・展示施設等を整備し、東海道や保土ケ谷宿の歴史文化を発信・ＰＲしていく。

また、観光やまち歩きを行う人に、休憩場所やトイレ等が必要とされていることや、保土ケ谷宿に多く残された歴史資料を展示するスペースが求められていることから、「道の駅」のような、休憩施設に付随した情報発信・PR 施設を導入することを検討する。

品川宿交流館　本宿お休み処

（2）地域の文化を育み・交流を促す

保土ケ谷宿周辺では、ガイドボランティアや名物会、他の東海道宿場町等と連携した取り組みなど、歴史的資源等を活かした地域活動が活発に行われている。東海道のみちの歴史を伝えることで、これら地域の文化・交流活動をより活性化させるとともに、市内外からの来街者との交流を促進する。

また、東海道のみちの歴史を伝えていくことで、地域や学校等と連携した地域活動をすすめていく。

地域まちづくり活動の様子

（3）箱根駅伝をはじめとするイベントへの対応

箱根駅伝や宿場祭りをはじめとする地域イベント時にも対応できるよう、利用環境を整える。特に箱根駅伝においては、沿道の観客とランナーの一体感に配慮するとともに、応援活動やにぎわい創出に必要なオープンスペースを確保する。

箱根駅伝の様子（保土ケ谷橋交差点）

箱根駅伝の様子（保土ケ谷橋交差点）

基本方針4：地域とともに創り育てるみちづくり

多くの人に愛され、継承していくために、計画・整備段階から、市民や地域の人たちが一体となったみちづくりを進める。また、永く継承していけるよう、整備後の活用や管理に十分配慮する。

（1）計画・整備段階からの市民や地域の参加

単に整備された道路空間等を利用するのではなく、計画・整備の段階からみちづくりに関わることで、みちにより愛着を持ち、大切に使い育てていくことにつながる。そのため、デザインワークショップ等の手法を活用して、地域とともに作っていく。

（2）管理・活用を考慮したデザインと枠組み検討

持続的な維持管理体制を維持管理への参加の仕方について、計画段階から地域と共に検討する。また、整備後の活用や維持管理に十分に配慮したデザインとする。

3 整備計画の方向

整備計画の方向1：歴史を継承する道路整備

①江戸時代や近代化以降の歴史を活かした近世・近代のイメージの付与

・継承する時代をイメージする素材や継承できる耐久性の高い素材の活用

・東海道や宿の雰囲気、近代遺構のみちづくりへの活用

・断面構成検討

・歩車道境界の植栽設置

②旧東海道・現東海道の道筋を継承する路面整備

・舗装による旧東海道と震災復興街路の道筋の再現

③往時の街の状況を想い起こさせるデザインの埋め込み

・町割石、屋号境界石

・旧・現東海道の道路境界履歴鋲

・見附(復元)、宿内外区分けの植栽・路面舗装変化

・都市形成の歴史を伝える歴史解説板の設置

本陣跡辻イメージパース

沿道のイメージパース

整備計画の方向2：周辺の各資源への回遊起点となる辻やサイン等の整備

①回遊起点となる５つの「辻」の整備

○歴史まち歩きの回遊拠点としての「本陣跡辻」

・軽部本陣跡前等の滞留空間の確保

・門構えの保存や鉄筋コンクリート造蔵等の活用

・まち歩き情報の提供や歴史資料の展示

・保土ケ谷宿のＬ字型の固有性の認識付与　等

○東海道を横断し今井川に流れる水路があった「大仙寺前石橋辻」

・回遊性を向上させるための横断歩道の設置

・交差点付近の溜まり空間の確保

・参道や往時の水路を想い起こさせるイメージ付与　等

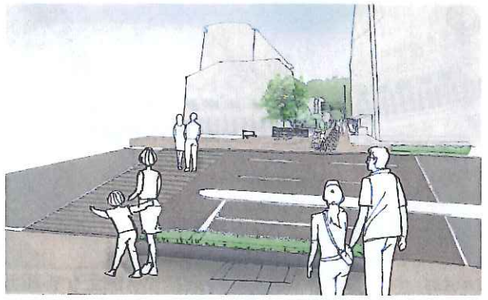
○宿内外を分けた「茶屋町橋辻」

・宿内外の切り替わり部分のイメージ付与

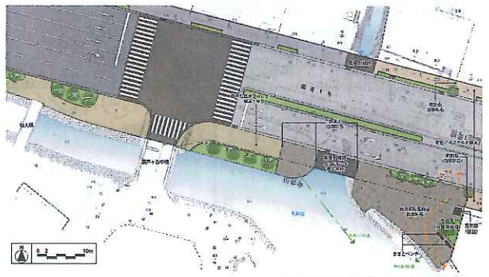
・一里塚・見附等の復元

・今井川への回遊の連続性確保

・茶屋町橋の木橋デザインイメージの付与　等



大仙寺前石橋辻イメージパース



茶屋町橋辻イメージ図

○新旧の東海道等とのつながりを生み出し駅伝の象徴となる「保土ケ谷橋辻」

・今井川や保土ケ谷駅方面への回遊の結節点としての滞留空間確保

・震災復興橋である保土ケ谷橋の再利用活用（桁の茶屋町橋での再利用や、桁・束柱等のベンチ等のストリートファニチャとしての活用）

・橋詰広場・番所(交番)などの空間構成要素の導入

・駅伝の応援や応援活動支援等の空間確保　等

保土ケ谷橋辻イメージ図

○金沢鎌倉道への回遊を促す「金沢鎌倉道辻」

・金沢鎌倉道につながるイメージを想い起こさせる舗装　等

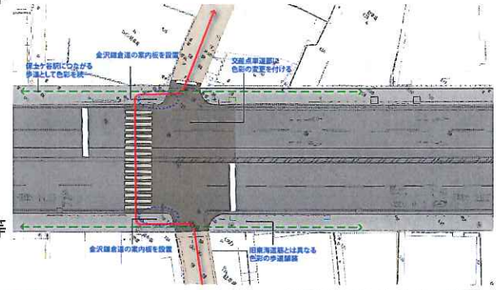
②歩行者案内サイン、歴史解説板の設置

・わかりやすい歩行者案内サイン等の整備

・各資源や歴史遺構の歴史解説板の設置

・保土ケ谷駅前までの旧東海道部分も含めた歩行者案内サインや歴史解説板などのデザイン統一

・暗色色彩のポール等歴史継承のイメージに馴染む工夫　等



金沢鎌倉道辻イメージ図

整備計画の方向3：拠点形成や駅伝を活用した情報発信・PR

①軽部本陣跡の門構えや鉄筋コンクリート造の蔵、旅籠本金子屋跡などの有効活用

・情報発信、歴史展示ＰＲ、まち歩き支援

〈活用イメージ：軽部本陣跡の鉄筋コンクリート造の蔵〉・歴史資料館・案内センターとしての活用

・曳き家と改修工事の実施

・保土ケ谷区と関係局が保存活用、管理運営の検討を行う。

②地域内外・市内外の交流の促進

・ガイドボランティア等に利用しやすいサインやトイレ、休憩場所の設置

・歴史的資源を活用した市内外の交流や地域学習の活動連携拠点形成

③駅伝での応援や沿道の一体感への配慮

・目印となる樹木等の設置

・応援や応援支援スペース等の確保

・沿道の応援に配慮した植栽検討

整備計画の方向4：地域参加による道路整備と維持管理

①市民参加による整備計画の策定

・周辺住民や活動団体とのデザインワークショップの実施

・みちづくり通信の継続的な配布

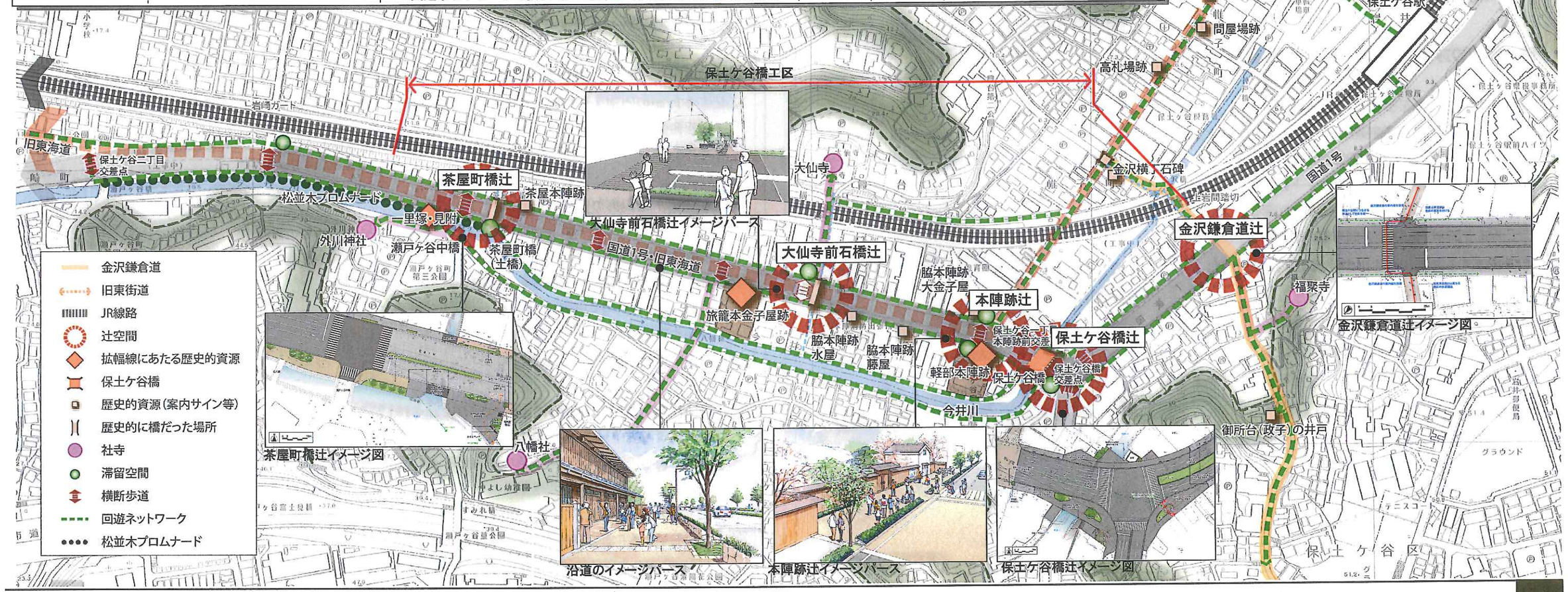
②市民参加によるみちづくりと維持管理

・町割石や樹木、歴史解説板などの寄進制度の活用

・ワークショップにおいて、維持管理の組織や方法について検討

町割石のイメージ

みちづくりの整備方針

■みちづくりの基本方針図

時代	各時代のみちづくり等の出来事	関連する歴史的資源	歴史の出来事に対応する辻				
			金沢鎌倉道辻	保土ケ谷橋辻	本陣跡辻	大仙寺前石橋辻	茶屋町橋辻
[中世] 鎌倉時代	金沢鎌倉道（　）、政子の井戸（　）	大仙寺	○				
[近世] 江戸時代 1601 年～	旧東海道（　）の道筋整備・確立	軽部本陣、旅籠本金子屋 脇本陣（大金子屋、藤屋、水屋）跡、茶屋本陣跡、歴史的資源（助郷会所、問屋場、高札場）跡（現在サインのみ）、金沢横丁石碑）			○		○
[近代] 明治時代 1887（明治 20）年 大正時代 ～昭和時代初期 1923（大正 12）年	鉄道開通 震災復興	大仙寺参道 駅東西駅前広場 保土ケ谷橋（震災復興橋梁） 軽部本陣跡の鉄筋コンクリート造の蔵 旅籠本金子屋跡住宅の屋根		○	○	○	
[現代] 昭和時代後期～ 今　後	国道 1 号（　）道路拡幅① 国道 1 号（　）道路拡幅②	軽部本陣跡の門 狩場工区整備、今井川整備、松並木プロムナード 保土ケ谷橋工区の整備 軽部本陣跡、本金子家跡、保土ケ谷橋、一里塚・見附(復元)の活用 回遊ネットワークの強化（辻空間(○)、滞留空間(●)の創出）	○	○	○	○	○